

日本厚生協会の歓喜力行団への眼差し

—『厚生の日』を手がかりとして—

A study on the Japanese recreation association's perspective on the Kraft durch Freude :

Analysis of “Kosei-no-Nihon”

都 筑 真

Makoto TSUZUKU

Abstract

The purpose of this study was to clarify the Japanese recreation association's perspective on the Kraft durch Freude (KdF) through analysis of “Kosei-no-Nihon”. The Articles about KdF published in “Kosei-no-Nihon” emphasized the practice activity over the purpose and the organization structure of the KdF. “Kosei-no-Nihon” reported the practice activity of the KdF as follows: 1) The Practice activity of the KdF covered widespread areas from various types of physical activities to the education to disseminate Nazi ideology. 2) Excepting domestic and foreign trip, the KdF continued the practice activity even in wartime. 3) Soldiers were provided opportunity to appreciate music and drama, while disabled soldiers were offered opportunity for physical activity and education. 4) The KdF attempted to make the Germans gain strength through joy, not refusing to get joy from leisure activity.

Keywords : *Japanese recreation association, Kraft durch Freude, “Kosei-no-Nihon”*

I. はじめに

厚生運動は、1930年代後半から1940年代前半にかけて、日本厚生協会^①が中心となって展開したものであり、体位向上の性格を持ちつつ、戦時下の状況に余暇生活の健全化によって対応しようとしたレクリエーション運動であった^②。日本の厚生運動のモデルとされたのは、イタリアの「ドーポ・ラヴォーロ」(Opera Nazionale Dopolavoro, 「労働の後」の意, 以下 OND) とドイツの「歓喜力行団」(Kraft durch Freude, 以下 KdF) という余暇組織であったと言われている^{③④⑤}。

OND は B. ムッソリーニがファシズム独裁を宣言した1925年5月に創設された、国民の余暇を組織化することを課題とした組織であり、スポーツ、旅行、芸能、職業訓練、社会救済事業などの活動を展開していた。また、KdF は1933年11月に「ドイツ労働戦線」(Deutsche Arbeitsfront, 以下 DAF) の一部局として創設された組織であり、映画、演劇、音楽会、スポーツ、旅行などの余暇を利用してナチ党に対する国民の同意を調達し、民族共同体への統合と労働能率の向上

を目指していた。

しかしながら、こうしたイタリアやドイツの厚生運動の組織を、日本の厚生運動の中核団体である日本厚生協会がどのように見ていたのか、そしてどのようにモデルとしたのかについての研究の蓄積は僅かである。こうした点に着目した研究としては、都筑(2013)^④や田野(2009, 2011)^{⑤⑥⑦}の研究が挙げられる。

都筑(2013)は、日本厚生協会の機関誌『厚生の日』で紹介された OND の目的、組織構造、実践活動を明らかにすることによって、日本厚生協会の OND への眼差しを検討している。都筑によれば、『厚生の日』は OND について次のように報じていたという。1) OND は、「明日の勤労」に向けた活力を養うための余暇の善用という理念の下で、体力の増強や精神的な慰安に繋がるような娯楽を勤労者に提供していくことを目的としていた。2) OND は、ファシスト党書記長を組織の長とし、体育部、旅行部、教育部、福利部などによって構成される OND 中央本部の指導監督の下で、イタリア各地にある2万以上の OND 地方支部が実践活動を運営した。3) OND の実践活動は、「団体的スポーツ」を中心として様々な種目を行うスポーツ、四季に応じた旅行から、演劇や音楽の観賞と実演、勤

日本女子体育大学(准教授)

労者の保健衛生管理に至るまで、広範な領域に及んでいた。ただし、上記のように紹介された OND を日本厚生協会がどのようにモデルとしたのかについては明らかにされていない。

田野 (2009) は、KdF の先進性を世界にアピールする舞台となった世界レクリエーション会議³⁾が日本の厚生運動に及ぼした影響について考察していく中で、日本厚生大会⁴⁾における日本厚生協会幹部の KdF に対する見解を取り上げている。田野によれば、KdF を日本の厚生運動のモデルとすることに関しては日本厚生協会幹部の意見は一致していたものの、KdF が「多面的な性格をもっていたため、日本人の評価も多様なものとならざるをえず」、「心身鍛錬を重視する立場や、休養・娯楽の重要性に注目する立場などが複雑に入り混じり」、それ故「ドイツの模倣に倣することも、日本独自の方向性を打ち出すこともできないまま、ばらばらな見解の寄せ集めに終わった」という。

また、田野 (2011) は、KdF に対する日本側の見解と、日本の厚生運動に対するドイツ側の見解を検討していく中で、『朝日新聞』など日本の新聞各紙に掲載された KdF に関する記事を紹介している。田野によれば、日本側では「厚生問題に関してドイツに範を仰ぐ必要性を認めつつも」、どのように範を仰ぐかに言及することなく、「上意下達」「減私奉公」などの『日本精神』の称揚によって煙に巻いてしまうかのごとき見解がたびたび掲載されたという。しかし、その一方で、KdF を賞賛するだけでなく、「べからず主義」に代表される日本の「過度な娯楽抑制策に批判」を向ける際に KdF の先進性を引き合いに出すような新聞記事も存在したという。

田野の研究からは、KdF を日本のモデルとするべきであるという点を除けば、KdF に対する見解は日本厚生協会幹部の間でも、新聞各紙においても様々であったことは見て取れるが、モデルにする際に重要となる KdF の目的、組織構造、実践活動を日本側、特に日本厚生協会がどのように捉えていたのかについては明らかにされていない。

本稿では、日本厚生協会の機関誌『厚生の日』に掲載された KdF に関する記事の中で、KdF の目的、組織構造、実践活動がどのように報告されたのかを明らかにし、日本厚生協会の KdF への眼差しを浮き彫りにしていく。本稿は、日本の厚生運動が OND や KdF から受けた影響、あるいはそれらとは異なる日本の厚生運動の独自性を解明するための基礎研究としての意

義を持つ。

II. 『厚生の日』について

日本厚生協会の機関誌である『厚生の日』は1939年10月に創刊され、1944年10月まで毎月発行された雑誌であり、論説、時評、講座、随筆、読物、グラビア、広告などで構成されていた。『厚生の日』の頁数は1941年までは160～180頁、1942年と1943年は120～140頁で推移していくが、日本の戦局が悪化していく1943年12月号から頁数は著しく減少し、1944年に入ると30頁程の小冊子となり、内容も貧弱となる⁵⁾。

また、『厚生の日』の記事内容は①厚生運動の総論、②勤労と厚生、③婦人の勤労問題、④地域の厚生運動、⑤保険・福祉、⑥施設・空間、⑦具体的な厚生活動、⑧外国の厚生運動の8つに大別される⁶⁾。本稿で取り上げるのは外国の厚生運動として紹介された以下の KdF に関する記事である。この4つの KdF に関する記事の中で、KdF の目的、組織構造、実践活動がどのように報告されていたのかを明らかにしていく。

<『厚生の日』に掲載された KdF に関する記事>

- ①保科胤「独逸の厚生運動」(1939年10月号)⁵⁾
- ②保科胤「戦争と慰楽 銃後ドイツ国民生活の一断面」(1940年9月号)⁶⁾
- ③津川主一「独逸に於ける国民生活と音楽」(1941年3月号)¹²⁾
- ④権田保之助「戦時下に於ける K.d.F の活躍」(1941年4月号)⁴⁾

III. 『厚生の日』にみる KdF の目的

記事①は、「勤労国民大衆の文化生活への参加と自らの生活向上に対する要求、彼等を健康且楽しい生活に導き、彼等に活動力を與える政治的必要」から設立された KdF の目的が紹介されている。記事①によれば、「職場の美化と、余暇の楽しい且健康なる利用とによって」、「独逸勤労国民大衆の生活の喜びと、健康と、そして能率とを増進」させていくことが KdF の目的であるという。国民の働く職場の環境を整備し、余暇には国民の生活に対する「喜び」を高めるような活動を提供することによって、健康と労働能率といった面での国民の力を高めていくという組織の名称に沿った目的を KdF が掲げていたことが記事①から見て取れ

る。

IV. 『厚生』にみる KdF の組織構造

DAF の責任者であった R. ライが DAF の下部組織として創設した KdF は、「スポーツ」「旅行・ハイキング・休暇」「宵の余暇」「ドイツ民族教育事業」「労働の美」の部門によって構成され、これらの部門の活動はナチ党の組織と同様に、大管区、管区、地方、拠点に分割され、上部組織の指導者が下部組織を指導するというシステムを採用していたり。

こうした KdF の組織構造については、『厚生』の KdF に関する記事ではほとんど言及されておらず、記事①の中に「KdF 団は一九三三年十一月末設立された。独逸勤労戦線 (DAF) が生みの親であり、その最高指導者ライ博士が団長である」ことが記されている程度であった。

V. 『厚生』にみる KdF の活動

1. 「スポーツ」部の活動

記事①は「スポーツ」部の特色として、「専ら楽しく且大衆向きのスポーツを狙い、技術の巧拙は問わず、参加の容易、費用の低廉」を挙げており、より多くの国民へのスポーツの門戸を開放していることが窺える。こうした点は実施される種目からも見て取れる。「スポーツ」部では「個々のスポーツに限ることなく、凡ゆる種類の体育運動を考慮し、乗馬、撃剣、庭球、ゴルフ」なども実施されていることが記されており、参加者が特定の種目だけでなく、様々な種目を行えるようになってきているという。また、記事①が発表された 1939 年 10 月の時期に「特に重要視されて来たものは工場スポーツであり」、工場での「スポーツクラブの結成」が奨励されていることが述べられているが、これは「産業従業員の体力向上」と「作業上の事故及び危険の防止」を意図したものであるという。KdF は組織の目的の一つに労働能率の向上を挙げているが、この時期に「工場スポーツ」が重視されたのは、特に工場での労働能率を向上させていくことが重視されたためであろう。

「スポーツ」部が「工場スポーツ」を重視していたことは、記事④が報じた工場関連のスポーツクラブ数からも窺い知れる。記事④によれば、「工場・鉱山等の事業場に於ける職場スポーツ団の数は一九三八年に約一

萬四千を算したが、今日では二萬を遙かに超えている」という。また、記事④では傷病兵を対象としたスポーツ活動が紹介されており、傷病兵慰問事業として「病院で行われる体育競技」は、「負傷者の状態を十分考慮して考察された各方面の種目が」実施されており、それは傷病兵の「健康の回復と全能率の再獲得」を意図したものであったという。

2. 「旅行・ハイキング・休暇」部の活動

記事①は、休暇に「正しく休養して明日のため新たな活動力を涵養する」という「観点から休暇利用の国内及び国外旅行、小旅行及び徒歩旅行が KdF 団によって組織」されたことを紹介しており、旅行のために「最近五年間に三千万人以上の参加者を獲得」したことを記している。記事①によれば、外国旅行の主な行先は軍事同盟を結んでいたイタリアであり、ポルトガル、北アフリカ沿岸、ギリシャなどへの「海洋旅行はすべて KdF 専属船によって」実施しているという。

記事④は、戦時に伴う「旅行・ハイキング・休暇」部の活動の変化について言及している。記事④によれば、戦時下において「旅行が交通上の取締りや軍事上の必要から、殆んど全く停止されざるを得ない状態」となったため、「遊歴を盛んにするという事で幾分の補いが付けられている」という。「遊歴」とはハイキングを指していると考えられるが、このハイキングが戦時中に制限された国内外の旅行に代わるものとして奨励されたのであろう。また記事④は、海洋旅行に利用されていた「K・d・F 船は病院船として海軍に帰属し」、ポーランドやノルウェーとの戦争において活躍したことも報じており、旅行船の軍事利用は旅行、とくに海洋旅行が制限される一因となったことが見て取れる。

3. 「宵の余暇」部の活動

記事②は、演劇や歌劇において「特に勤労者のための観劇日が設けられ、頗る安い入場料 (普通の三分の一以下に特別割引) で勤労者階級の総見が」毎週 1 ~ 2 回行われていることを報じており、「勤労者階級」に配慮した演劇や歌劇の機会を設けていることが見て取れる。同様の配慮は 1940 年のワグナー音楽祭においてもなされており、記事②によれば、この年のワグナー音楽祭には「一般の観衆を一人も入場させず」、「専ら戦線の兵隊と銃後の第一線に働く労働者が団体観劇した」という。記事③もこの祭典に言及しており、「戦線に活躍した兵士、並びに軍器製作に疲れた労働者達」

のために開放されたことを記している。

また、兵士への配慮は軍隊慰問という形でもなされており、記事②は、KdFが演劇隊や楽団を派遣し「戦争勃発以来今日〔1940年9月〕までに軍隊慰問の会を催すこと十萬回以上、その参加人員は総計三千万人を超える」ことを紹介している。軍隊慰問については記事④も触れており、1940年4月に西部戦線に攻勢をかける前の2～3か月の間に、KdFが「月平均一万五千回の軍隊慰問の催し」を行ったこと、そして1940年6月のパリ占領以降はデンマーク、ノルウェー、フランスなどの占領地に演劇隊や楽団を派遣し、占領地内で5万5000回の軍隊慰問の公演を実施したことを紹介している。

ワグナー音楽祭での兵士に対する優遇や軍隊慰問からは、「宵の余暇」部の活動が国内外の戦線で戦うドイツ兵をも対象としていたことが見て取れる。

4. 「ドイツ民族教育事業」部の活動

記事①は、「KdF団の公民教育は、ナチス世界観を国民に植付けんとするものであり、活動の中心は公民教育道場、即ち夜間学校」であることを記しており、「ナチス世界観」の注入という「ドイツ民族教育事業」部の目的と「夜間学校」が活動の中心となっていることを紹介している。記事①によれば、「夜間学校」では人種学、遺伝学、政治学、ドイツ史など「ナチス世界観」の注入に適した科目が教授されており、「夜間学校」以外にも音楽教育、現代詩朗読会、国内外の文化視察旅行、巡回文庫などが実施されていたという。

記事④は、この部が傷病兵慰問事業として、負傷して快癒した兵士の精神を高揚させ、彼らに新たな「仕事を授ける」ための講座を開講していることを取り上げており、この部の活動においても「スポーツ」部と同様に傷病兵を対象として、彼らの精神的回復と新たな就職のための学習機会を提供していることが窺える。

5. 「労働の美」部の活動

記事①は、「労働の美」部が「職場を美化し、その中に勤労の喜びを導き入れ、『喜びを通じての力』の思想を実現しようとする」「労働美化運動」を推進し、職場「に於ける採光、換気の状態、騒音塵芥及び暑熱の状態等が調査され」、問題がある場合には改善を図っていることを紹介しており、KdFが余暇の活動だけでなく、職場の環境改善によっても国民に「喜び」をもたらそ

うとしていることが見て取れる。

記事④では、戦時下でもこの部の活動が等閑視されることなく、「工場に暖かい食事」「よい光線を与えよ」「健康なる空気を」等々の運動が一層強度に推進され、約8500万マルクがこの部の活動のために投資されたことが報告されている。

VI. おわりに

本稿の目的は、日本厚生協会の機関誌『厚生の日』に掲載されたKdFに関する記事の中でKdFの目的、組織構造、実践活動がどのように報告されていたかを明らかにすることであった。

『厚生の日』に掲載されたKdFに関する記事は、KdFの目的や組織構造よりも、実践活動の紹介に重点を置いていた。

KdFの実践活動は、様々な種目に取り組みスポーツ、国内外の旅行、ハイキングから、演劇や歌劇の観賞、職場の美化、ナチ党の世界観を注入する教育に至るまで、広範な領域に及ぶものとして紹介された。

国内外の旅行を除けば、戦時下においてもKdFの活動は継続し、戦線で戦う兵士にも音楽や演劇、傷病兵にもスポーツや教育を提供していたことが取り上げられている。

戦時下においても余暇活動を通じた「喜び」の享受を否定することなく、「喜び」を通して戦時を生き抜く「力」を国民に得させようと試みるKdFの活動を『厚生の日』は報じていたのである。

今後は、『厚生の日』で紹介されたONDやKdFに関する記事内容と、日本厚生協会が展開する厚生運動を比較しながら、日本の厚生運動がONDやKdFから受けた影響、あるいはそれらとは異なる日本の厚生運動の独自性を検証していくことが課題となるが、これについては他日を期したい。

注

- (1) 厚生運動の中核団体となる日本厚生協会設立の直接的契機は、1940年に東京オリンピックとともに、第四回世界レクリエーション会議を日本で開催することが決定したことであった。この会議の受け皿となる国内協会の結成が先決問題となり、協会設立の準備は東京市主事の磯村英一を中心に進められていった。この過程で、レクリエーションの訳語に、設立間もない厚生省に因んだ「厚生」という語が当てられた。1938年4月に日本厚生協会の発起人総会・創立総会が開かれ、日本厚生協会が誕生したので

あった。この設立の経緯については、磯村(1939)⁷⁾の著書を参照。

- (2) 日本の厚生運動については高岡(1997)⁹⁾と藤野(2000, 2003)²⁰⁾の研究を参照。高岡は戦時期日本における権力と都市の相互関係を追究していくために、また藤野は日本ファシズムにおける「人的資源」の培養・動員の特異性を解明するために、厚生運動に着目している。
- (3) 第一回世界レクリエーション会議は、1932年のロサンゼルス・オリンピックと同時期に、同市で開催された。続く第二回は1936年にドイツのハンブルクで開かれ、その折、第三回は1938年にイタリアのローマで、第四回は1940年の東京オリンピックに合わせて日本で開くことが決定された。KdFの存在を世界にアピールする舞台となったのは、1936年の第二回大会である。また、1940年に日本で開催予定であった第四回大会は、日中戦争の長期化によりオリンピックとともに中止となった。
- (4) 日本厚生大会の第一回は東京(1938年)、第二回は名古屋(1939年)、第三回は興亜厚生大会と銘打って大阪(1940年)で、さらに1942年には日本厚生協会の主催ではなかったが、満州で東亜厚生大会が催されている。日本厚生大会の内容については、都筑(2011)¹³⁾の研究を参照。

引用文献

- 1) Bernett, H. (1979) Nationalsozialistischer Volkssport bei "Kraft" durch Freude, *Stadion V* (1) : 89-146.
- 2) 藤野豊(2000) 強制された健康 日本ファシズム下の生命と身体, 吉川弘文館, 東京.
- 3) 藤野豊(2003) 厚生省の誕生 医療はファシズムをいかに推進したか, かもがわ出版, 京都.
- 4) 権田保之助(1941) 戦時下に於ける K.d.F の活躍, 厚生
の日本 3(4) : 11-16.
- 5) 保科胤(1939) 独逸の厚生運動, 厚生
の日本 1(1) : 146-153.
- 6) 保科胤(1940) 戦争と慰楽 銃後ドイツ国民生活の一断面, 厚生
の日本 2(9) : 38-43.
- 7) 磯村英一(1939) 厚生運動概説. 常盤書房, 東京.
- 8) 園田碩哉(1989) 厚生運動の研究-『厚生
の日本』誌の記事分析を通じて-, 自由時間研究 3 : 10-16.
- 9) 高岡裕之(1997) 総力戦と都市-厚生運動を中心
に-, 日本史研究 415 : 145-170.
- 10) 田野大輔(2009) 余暇の枢軸-世界厚生会
議と日独文化交流-, ゲシヒテ 2 : 21-39.
- 11) 田野大輔(2011) 日本の歓喜力行団-厚生
運動と日独相互認識-, 甲南大学紀要 文学編 161 : 109-121.
- 12) 津川主一(1941) 独逸に於ける国民生活
と音楽, 厚生
の日本 3(3) : 24-32.
- 13) 都筑真, 浅野哲也, 村井友樹ほか(2011) 戦時
下における日本の厚生運動-厚生大会(1938-1940)
を中心として-, 筑波大学体育科学系紀要 34 : 27-43.
- 14) 都筑真, 村井友樹(2013) 日本厚生協会
のドーポ・ラヴォーロへの眼差し-『厚生
の日本』を手がかりとして- : 体育スポーツ史
にみる戦前と戦後 (真田久ほか編著), 道
和書院, 東京.

(平成28年9月16日受付)
(平成28年10月26日受理)

